

北大生物の会・東京

第44回談話会のご案内

下記の日程で「北大生物の会・東京」談話会を開催致します。
会員の皆様、会員以外のご参加いただけます。
皆様お誘い合わせの上、是非ご参加ください。

本会は、北大で生物学系の分野を学んだ卒業生たち（主として農学部、理学部、水産学部・卒）が、広範囲な分野のテーマについて、互いに啓蒙しつつ交友を深めるために、同士を募り、1995年に発起されました。毎年春と秋に談話会を開催しています。

今回は池内 達郎 先生をお招きしてお話を伺います。先生には『新しい時代にマッチした「遺伝学用語集（日本遺伝学会・編）」の発行と遺伝学用語の改定：「優性、劣性」はやめて「顕性、潜性」に、など』というタイトルでお話を頂きます。このことは下記の講演要旨に記されているように、マスコミでも報じられています。遺伝学用語が取り上げられた背景やそれがどのような分野にどのように波及しているかなど、極めて貴重で興味深いお話が伺えるものと楽しみにしております。

日時	2017年10月28日（土曜日）14時～17時	
場所	東京医科歯科大学・食堂棟1階レストラン「あるめいだ」 Tel: 03-3811-9607	
	*地図は2ページをご覧ください	
	〒113-8510 東京都文京区湯島 1-5-45	
	【アクセス】JR「御茶ノ水」駅、東京メトロ丸ノ内線「御茶ノ水」駅、 東京メトロ千代田線 新御茶ノ水駅	
談話会講師	池内 達郎 先生（1964年北海道大学水産学部水産増殖学科卒）	
演題	「新しい時代にマッチした「遺伝学用語集（日本遺伝学会・編）」の発行と遺伝学用語の改定：「優性、劣性」はやめて「顕性、潜性」に、など」	
	*講演要旨および演者略歴は3ページ以降をご覧ください	
会費	無料	
ご連絡先	庶務幹事：祖父尼俊雄（院理・修（動物）S38 修了）	
	E-mail: toshi_sofu@jcom.zaq.ne.jp	

*談話会講演の後、15時45分より17時まで講師の先生と直接お話し出来る場として懇親会を行います（会費：2,000円、会場は同じ「あるめいだ」です）。懇親会への参加をご希望の方は、メールにて事前にご連絡くださいますようお願い致します。

ご不明な点がございましたらご連絡ください。皆様のご参加をお待ちしています。

<次ページにつづく>

これまで過去3年間（6回）の談話会では、下記のような内容で講演を頂いてきました。

- 第38回談話会 「動物園と野生生物の保全」 講師：田畑 直樹 氏（2014.11.1）
- 第39回談話会 「水族館の哺乳類」 講師：荒井 一利 氏（2015.6.20）
- 第40回談話会 「ペットの加齢と診断 ～動物病院における会計履歴から見えてくること～」
講師：田中 紀子 氏（2015.10.24）
- 第41回談話会 「視覚生理学の研究史と無脊椎動物の視覚」 講師：片桐 康雄 氏
（2016.6.25）
- 第42回談話会 「生き物と放射線」 講師：村松 晋 氏（2016.10.24）
- 第43回談話会 「北大で学んだ浮遊生物学」 講師：福地 光男 氏（2017.7.8）

次回以降の談話会につきましてもご案内させていただきます。



御茶ノ水橋を渡って外堀通りからの門を入ると、階段（スロープ）を上がったところに断面が楕円形の建物（食堂棟）があります（青の矢印）。その入口から地下に降りてください。

レストラン「あるめいだ」地図

<講演要旨および演者略歴は3ページ以降をご覧ください>

第 44 回談話会 講演要旨

新しい時代にマッチした「遺伝学用語集（日本遺伝学会・編）」の発行と遺伝学用語の改訂：「優性、劣性」はやめて「顕性、潜性」に、など

池内 達郎（1964 年北大水産学部卒、1972 年北大大学院理学研究科（動物学専攻）博士課程修了）

20 世紀後半からの生命科学の急速な進展には目を見張るものがあります。今や学問の成果がその世界にとどまらず、一般市民の医療、健康、食生活に直接に関わってくる時代です。21 世紀はバイオサイエンスの時代、あるいはゲノムの時代だといわれます。しかしそんな中で、人々の遺伝学分野に関わるリテラシーは十分とはいえません。遺伝子組換えや遺伝疾患といった言葉に誤解や偏見を覚えたり、「遺伝」という言葉そのものに暗いイメージを抱いたりすることも多いのではないのでしょうか。市民の遺伝にまつわる基礎知識を一般教養のひとつとして定着させるための原点はやはり学校教育にあります。

日本遺伝学会は、今後の日本の遺伝関連教育やメディアも含めた一般社会において、より適切に遺伝学用語が使用されることを願って、“遺伝学をさらに新しくするための「新遺伝学用語集」”を発行しました。編纂に関わった一人として、本書発行の理念、概要、そしてその背景をご紹介します。本書の正式名称は：「遺伝単：遺伝学用語集一対訳付き」、（発行：2017 年 9 月、NTS 社）。

http://www.nts-book.co.jp/item/detail/summary/bio/20170929_182.html

大手新聞の社会面（朝日、毎日、共同通信）や NHK ニュースメディアでも大きく取り上げられています。

本書では約 3000 語が [英和、和英] の対訳付きで収録され、その約 1 割に簡単な説明付き、そして重要語 47 個を選定して詳しい解説をし、さらに読者の関心を高めるために 10 の分野を紹介する「コラム」を設けました。それぞれの用語については、従来使われてきた訳語の適正検討と変更、意味の統一化、新用語の追加、などを行ってきました。

とくに重要な用語の変更を、本書の冒頭に掲載しました。その主なものは（旧来の訳語は ⇒ 側に変更）：dominant / recessive 優性/劣性 ⇒ 顕性 / 潜性、allele 対立遺伝子 ⇒ アレル、mutation 突然変異 ⇒ [突然] 変異、haploid 半数体 ⇒ 単数体、variation 変異 ⇒ 多様性、そして color blindness 色覚異常に色覚多様性(color vision variation) の概念を導入、などで。これらの改訂用語から二つだけを取り上げて少し説明します。

「優性、劣性」はメンデルの法則で説明される学校教育での定番であり、一般市民にも古くからなじみのある言葉です。しかし「優れた、劣った」という語感が強く、誤解されやすい用語であることが以前から指摘されてきました。臨床遺伝学の場合は、劣性遺伝病の当事者や家族にとって、その語の響きは深刻でさえある、といわれます。そこで優性、劣性という用語使用の歴史的背景を参考にしながら、語感がより中立的な「顕性、潜性」に変更することになりました。

「色盲、色弱」の言葉を避けて、近年の教科書や一般社会では「色覚異常」という用語が使われています。しかし、一般集団中での頻度が比較的高く（わが国では男性の 5%）日常生活に不便がない遺伝形質に対して「異常」と呼称することには違和感もあります。そこで本書では「色覚多様性」という包括的な新しい表現（概念）を提唱しています。「色覚異常」は異常ではなく色覚についての個人差であることを意味します。

こうした改訂が今後の遺伝学教育や教科書づくりに反映されるよう、日本遺伝学会では今後、文科省や出版社、メディアを対象に広報活動を進めることにしています。

[略歴]

1964 年 北海道大学水産学部水産増殖学科卒

1972 年 北海道大学大学院理学研究科博士課程修了

1968～1971 年 米国ニューヨーク州 Roswell Park 記念研究所研究員

1974～1975 年 旭川医科大学助手（産婦人科学教室）

1975～1979 年 北海道大学理学部動物染色体研究施設助手

1979～2007 年 東京医科歯科大学難治疾患研究所助教授

2007 年～ 多数の大学、専門学校の非常勤講師

2009～2013 年 （財）染色体学会理事長

2015 年 日本人類遺伝学会名誉会員

専門：

細胞遺伝学、ヒト遺伝学、腫瘍遺伝学